

2019. 10. 13 第2主日召天者記念礼拝

創世記 1:26-28、2:7、ヨブ 1:21「神が与えたいのち」

### 聖書

26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

7 神である主は、その大地のちりてひとを形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

21「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」

### はじめに

今日の召天者記念礼拝によろこそおいで下さいました。故人の在りし日に思いを向け、今は天国にて憩う一人一人であることを覚えて、主の慰めをお祈りします。やがて、私たちも天国で再会できることを信じて、与えられた地上の歩みを最後まで全うしたいと願います。

私が初めて人の死に直面したのは、保育園の年長の時でした。朝は普通に保育園に出かけ、帰ってきたら曾祖母が自宅で亡くなっていました。当時はまだ土葬が許された時代だったので、家の裏山に埋葬したことを覚えていません。子ども心に「ひいおばあちゃんはどこに行ったんだろう」と、死んだ人はどこに行くのかと疑問に思ったことを思い返します。その答えを得たのは

聖書を知ってからでした。そこには人間の存在と地上の歩みの意味が書かれていました。今日の礼拝を通して、人はどこからきてどこに行くのかを考えてみたいと思います。

## 1. 存在の理由は？

私は聖書を通して、人間は神さまによって造られたということを知りました。これは大きな衝撃でした。なぜなら、今までそのような考え方を聞いたことがなかったからです。

生命の起源について色々な説があるようですが、私は学者ではありませんのでその辺りの議論については詳しくはわかりません。学者たちは生命の起源について議論を重ね、地球の元始大気を再現した中に火花を放電したらアミノ酸が誕生したという 1950 年代のミラーの実験を基に生命の起源を化学の進化の方面から考えるようになりました。ある人たちは隕石によって地球外からアミノ酸が持ち込まれたと考える人たちがいます。他にもたくさんの説があるようですが、そのような学問が発展する背景には、人間の存在理由を知りたいという人の願いがあるからではないでしょうか。

聖書は創世記 1:1 に「はじめに神が天と地を創造された。」とあり、天地創造の記事から始まります。光を造り昼と夜を分け、水を造り大空と大地を分け、植物を生えさせ、太陽や月や星を定め、地上の動物、海の生き物を創造し、最後に特別な存在として人を創造したという記述があります。「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。『生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。』」（創世記 1:27, 28）。人間は目的をもって創造の冠として造られたのです。仮に大気中の成分から有機物が作られたとしても、作られた過程は説明できても、なぜ作られたのかという理由や目的は説明できません。でも、知りたいのはそこではないでしょうか。私という存在がなぜここにいるのかという理由が知りたいのです。もし、存在の理由がないとなれば、生きている意味もなくなります。存在理由もないまま生きることだけが

人間に求められているとは思えません。生きることは楽しくもあり辛くもあります。そうしたことに何の意味もなく向き合うことが人生だとしたら、そんな無味乾燥な一生はご免です。

## 2. 愛のイメージに創造された

創世記 1:26-28 に人間の誕生について記されています。神さまは「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。」と言われ、具体的には「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」とあります。「神のかたち」とは像、イメージ、型取ること、型に流し込むことを意味する言葉で、四肢五体を表しているのではなく、神さまのイメージを表しています。神さまが持っておられるご性質を注がれて造られたということです。

神のかたちに造られたときの鍵になることばが、「われわれのかたちとして」という「われわれ」にあります。なぜ複数形なのでしょう。そこには三位一体の神さま、すなわち父なる神さま、御子なるイエスさま、聖霊なる神さまが愛によって完全に一つに結ばれていることがイメージされています。その愛のイメージで人が造られたので、人は愛を求め愛に生きることを喜ぶのです。人から愛を奪ってしまったら、人は生きて行けないです。愛のない世界で起こる様々な悲しい出来事を見てもわかるように、人にとって一番大切なのは愛であると思うのですが、皆さんはいかがでしょうか。聖書は言います。「いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。愛を追い求めなさい。」(I コリント 13:13-14:1)。

神の愛のイメージで造られた人。大地のちりで形造られ、そこにいのちの息が吹き込まれて、人は「生きるもの」(創世記 2:7) となったのです。

## 3. 正しい管理者として創造された

神さまはこうして造られた人に目的を与えなさいました。それが創世記 1:28 「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」です。ここでいう「支配せよ」とは人

間が自然界や動植物を好き勝手に使って良いということではなく、創造の秩序の中で正しく管理することが求められているのです。神さまが造られた世界の正しい管理者となって生きることが人に与えられた務めなのです。この務めが人間の欲望や利益のために乱用されると、創造の秩序が壊されてしまい、混乱と破壊が起こるのです。環境問題なども人間の欲望と無関係ではありません。他の生きものとの調和も管理者として見たときに正しいかどうか問われています。また人と人との関係もしかりです。人間関係もまた神さまの創造の中で愛によって秩序が保たれていなければなりません。神さまは最初にアダムを創造し、アダムのふさわしい助け手としてエバを創造し、二人は夫と妻の関係を結びます。夫婦を人間関係の最小単位として定められたのです。ここから人類の歴史が始まって行きます。

「神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。」(Iコリント 14:33)ということばがありますが、愛によってこの世界に平和(秩序)をもたらすために神さまは私たちにいのちを与え、この世の営みを託してくださったのです。私たちにはそのような目的が与えられていることを忘れないで、この世界に神さまの愛を証していきたいと思います。そのためにまず自分が神さまから愛されていることを知ることができるといいように。キリストの十字架によって表された神の愛を知る者とさせていただきます。

#### 4. 神さまの御手にある一生

このようにして神さまは人にいのちを与え、地上の生涯を与えてくださいました。人は知ると知らずとに関わらず、神さまからいのちを与えられて生かされているのです。願わくはそれを自覚的に捉えて人生の意味を見出し、全うできれば幸いです。

人には様々な地上の生涯が与えられています。長寿を全うして穏やかに生涯を閉じる方もおられれば、幼くしていのちを閉じる方もいます。事件や災害に巻き込まれ理不尽な終わりを迎える方もおられます。そこには人間の罪が深く関与していることもあり、痛みや辛さを背負わざるを得ない現実があります。その痛みや辛さを少しでも除くことができるために、すべての者が

神さまの愛の秩序に立ち返り、愛による生涯を全うしたいと思います。一部で悲しい現実があることを認めながら、そこにも、「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」(ヨブ1:21)のみことばは真実であると受け止めます。人のいのちはすべて神さまの御手の中にあります。長さにおいて、あるいはいのちの置かれた環境や状況に違いはあっても、すべてのいのちが神さまの愛の御手の中にあるのです。

## 結び

召天者記念礼拝は召された方々を偲び、天国への思いを馳せる時ですが、同時に今生かされている私たちがどう生きるかを考える時でもあります。今日の礼拝は私たちがどう生きるかに焦点を当て、私たちは神さまの創造の冠であることに思いを向けました。

創造の冠として生きることを意味を、今年東大入学式で祝辞をされた上野千寿子氏のことばを借りて締め括りたいと思います。「世の中には、がんばっても報われないひと、がんばろうにもがんばれないひと、がんばりすぎて心と体をこわしたひと……たちがいます。がんばる前から、「しよせんおまえなんか」「どうせわたしなんて」とがんばる意欲をくじかれるひとたちもいます。あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください」。東大生に語られたことばとしてだけでなく、私たちも「自分のためだけに」「勝ち抜くためだけに」与えられた人生を使わないで、「人のために」「弱さを抱える人のために」生きる者でありたいと願います。

世には3つのタイプの人がいるそうです。人に惜しみなく与える人、真っ先に自分の利益を優先させる人、損得のバランスを考える人。この中で惜しみなく与える人が人生を豊かにさせる人です。神さまから与えられたいのちを人々のために与える生涯、まさにイエス・キリストの生涯です。この道を

歩むために神さまは私たちを創造し、この世に置いてくださったのです。祝福を祈ります。